



## ボランティアで知った被災者の現実

シンガーソングライター KEYNA

19歳



福生市熊川 / 角田圭奈 (つのだけいな) さん

1995年、6才の時、父の作家・角田四郎さん、母と共に阪神淡路大震災の被災地、神戸へボランティアとして訪れ、以降、台湾大震災や三宅島大噴火、北海道有珠山大噴火、2004年の新潟中越大地震などの被災地でボランティア活動を実践。特に、新潟では福生市のボランティアグループとも一緒に活動し、被災した人たちを、高校生として、歌手として励まし、元気づけました。福生一中1年生のときには、青少年のボランティア活動の奨励を目的に設けられた国際的な賞、プルデンシャル・ボランティア全国賞を受賞しています。

### ミュージシャンとして…

圭奈さんは、神戸でガレキの中からギターを取り出して演奏する被災者達に共感したことがきっかけで音楽活動を開始しました。幼い心に映った災害、戦争、争いなど、社会に存在する無数の矛盾を肌で感じ、音楽を通して自らのメッセージを世界へ発信して行こうと決意。ミニアルバムをリリース。大学生のいま、全国ツアーや各地のボランティア活動などで“社会”をテーマに歌い続けています。

阪神淡路大震災で、3か月もの間、母親以外のだれとも話せなくなり、医師でも治せなかった女の子と遊んでいるうちに、その子がほかの子とも話せるようになったという体験で「子どもだからできるボランティアがある」ということに気がきました。そんな思いを大切にしているという角田圭奈さんに、ボランティアとしての姿勢や、子どもや青年、そして女性の視点から感じた被災時の生活などをお話しいただきました。(中面へ続く)